

お嬢様はボクの  
ojosama ha boku no oshiego

三津谷鷹介

表紙イラスト／鈴音れな

# 調教え子

おし

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『お嬢様はボクの調教え子』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



お嬢様はボクの  
ojosama ha boku no oshiego

# 調教え子

お

三津谷鷹介  
表紙イラスト / 鈴音れな

## 登場人物紹介

### Characters

---

うのせあや

#### 鶺鴒之瀬綾

来春、受験を控えた学生。お嬢様学校に通う箱入り娘だが、父親の方針で外部のよりレベルの高い学校を目指している。黒髪の美しい美少女。

くらしそうま

#### 倉石聡真

有名進学校に通う男子学生。学園の理事に頼まれてその知人の娘の家庭教師を務めるうちに彼女のことを好きになっていく。

「じゃあ、今のを応用して練習問題の2から4までやってみましょうか。公式はもう見ないで、時間は……そうだな、少し厳しいかもしれないけど、20分」

学習机の横に立った倉石聡真くらいし そうまが、眼鏡の位置を直しながら次の課題を指示すると、椅子に座って懸命にノートとにらめっこをしていた長い黒髪の少女はちよつと驚いたように目を丸くして彼の顔を見上げた。

「どうしました？ 僕は、綾さんならできると思つて課題を考えてるんですよ」

「……もう、先生はいつもそうやってうまく綾を乗せておしまいになりますのね」

鶺鴒うのせあや之瀬綾は、聡真の言葉を聞くとわずかに目を細めながら笑みを含んだ声で言葉を返してきた。

台詞だけだと教師に皮肉を言っているようにも聞こえるが、黒メノウに銀砂を散らしたようにきらきらときらめく大きな瞳で見上げられながら澄んだ声音で話しかけられると、生意気な印象はまったく受けず、むしろ心を許して甘えかかってきている子猫の愛らしさしか感じない。歳の割には大人びた物言いをする女の子だったが、それはある意味で上流階級のお嬢様としてしつかりとしたしつけを受けている証拠といえるかもしれない。

ほっそりとした白い顔に浮かぶたおやかな笑みを見ていると、思わず課題に手心を加えてしまいそうになって、聡真は慌てて時計を見る振りをしながら目を逸らした。

「そうですね。それが僕の仕事ですからね。はい、じゃあ……スタート」

「あっ！ お待ちになってくださいな。まだ、準備が——」  
家庭教師の少年が開始を宣言すると、少女もすぐに元の真剣な表情に戻って問題文を読み始める。

そうやって教え子が問題に取り組む様子をしかつめらしく見守っているように見せかけながら、聡真はこのところいつもそうであるように、内心で勉強とはまるつきり関係ないことを考え始めていた。

(……真面目な顔も、やっぱり可愛いなあ……)

由緒ある家の娘らしく、綾は濡れたように艶を湛えた黒髪を長く伸ばして背中に流したシンプルだが気品のあるストレートヘアにしていた。両サイドにはリボンを結わえた編み込みを下げていて、それが白い横顔の輪郭をなぞるように流れているのが深窓の令嬢らしい優雅さを感じさせる。

少女はそのしなやかな髪を時折かき上げながら、教師の視線にも気づかずじつと机の上に広げたテキストに目を落として問題に取り組んでいた。

以前から、気がつくくと彼女に見惚れてしまうのを自覚してはいたのだが、最近はことに酷くなっている。こうして彼女を教えている時はもちろん、昼間学校で授業を受けている時も、自宅で自分の勉強をしている時にも、いつの間にか教え子の桃のように瑞々しい頬

に浮かんだ控えめな笑顔や、さらさらとなびく黒髪を思い浮かべてしまっていた。

綾本人がそのことに気づいていない様子なのが唯一の救いだったが、無邪気な彼女が先ほどのように親しげな態度を見せてくれるのは、今の彼にとってはもはや苦痛でしかない。(はじめはちよつと、距離を置かれてる感じだったけど、いつの間にかあんな風に甘えるようなそぶりまで見せてくれるようになって。さつきなんて、思わず手を伸ばしてしまいたい) そうになったじゃないか……)

立場と欲望の板ばさみになって身動きの取れなくなった現実から逃避するように、聡真の意識は初めて彼女と会った日の記憶にさまよい込んでいった。

「今回の件で以前から懇意にしていただいてる川添先生かわぞえに相談したところ、君を薦められてね。あの啓英で成績は入学以来トップクラス、素行も極めて優秀で問題なしとの折り紙つきだった。素晴らしいね。ご両親もさぞや将来に期待しておられることだろう」

おそろしく天井の高い豪華な応接室で、高級そうなソファの柔らかい感触にかえって落ち着けないでいる聡真に気さくに笑いかけながら、鶴之瀬功一こういちは話を切りだした。

この広い邸宅の主にして世間では名の知れた製薬会社のオーナー社長、そして聡真にとつては今回のアルバイトの雇い主となる恰幅のいい中年男性は、やり手の企業家にありがちながらギラギラした精力的な男を予想していた少年にはちよつと拍子抜けするくらい穏やか

な物腰の持ち主だったが、余裕をもってゆつたりと語りかける口調には下手な威圧などよりもよほど自然に人を従わせるような静かな迫力があつた。

「はい、あの……恐れ入ります」

聡真が通う啓英学院は国内でも有数の難関私学として知られている。ある日突然、理事の一人に呼び出された時は何事かと緊張したが、まさかそれが家庭教師のアルバイトをやつてみないかという誘いだとは思わなかつた。

相手が有名な財界人の一人娘だと聞いて気後れしなかつたと言えば嘘になるが、破格の報酬と若干の好奇心にも釣られて結局は承諾することになつた。理事の老人が言うには、人員の選定に当たつては成績ももちろんだが素行や性格を第一に重視したとのことで、教え子が年頃の少女であることを考えたらこれは当然の条件だろう。

ところが、肝心のその点に関して、聡真は自分では別に自慢できるようなことではないと思つているのだった。

いわゆるガリ勉ばかりが集まると思われがちな啓英でも、適度な成績をキープしつつ遊びの方もちゃんと楽しんでる要領のいい少年たちがいないわけではない。自分がそうやって盛り場に繰り出すグループの中に入らないでいるのは、別に心底真面目なわけでも何でもなくて、単に度胸が足りないだけだからというのはよく分かつていた。

そんな彼の内心も知らず、差し向かいでしばらく話をした功一は、おそらくは合格と判



断したのだろう。側に控えていたお手伝いさんに何事かを言いつけると、彼女は黙って応接室を出ていった。

「では、倉石くん。娘に会ってもらおうかな。ちよつと過保護に育ててしまったせいで人見知りの気があるんだが、君ならば大丈夫だろう」

彼が言い終わると同時にドアがノックされた。お手伝いさんが開いたドアから入ってきた少女を失礼にならないよう自然に見ようとして、しかし聡真はすぐにそんなことも忘れて彼女の容姿に見入ってしまった。

淡いピンク色の清楚なワンピースで慎ましく歩く姿がいかにも上品でお淑やかそうなのは育ちの良さから予想できたとしても、恥ずかしげにちよつとうつむけられたその顔がびつくりするほど可憐で愛らしかったからだ。

肌は透き通るように白く、ストレートの艶やかな黒髪に縁取られて、まるでほのかに輝いているようだった。わずかに目を伏せているせいで、長いまつ毛がよく目立つ。

頬や唇はふつくと柔らかそうで、童女のようなあどけない印象を聡真に与えていた。体格が華奢な上に身体のラインが出にくいワンピーススタイルということもあり、女性らしい凹凸が目立たないのもその印象を強めている。

お腹の前でもじもじと組み合わせられた小さな手と細い指に、世間ずれしていないお嬢様の恥じらいが表れていた。

「……娘の、綾だ」

功一の声が耳に届いて、聡真ははっと自分を取り戻した。惚けていたのは、おそらく一瞬だったのだろう。功一も少女も、自分の態度を不審には思っていないようなのは幸いだつた。

「綾、こちらは今日からお前の勉強を見てくださる倉石聡真先生だ。ご挨拶しなさい」

黒髪の少女——綾は、静かにテーブルの側に歩み寄つてくると父親の椅子の隣に立った。伏せていた顔を上げると、聡真と目が合う。

また一つ、少年の鼓動がどくんと強く打つた。

細く華奢な身体に相応しく、頭も大人の両手ですっぽり包めてしまいそうなほど小さかつたが、長いまつ毛の下で黒目がちな瞳はぱっちり大きく見開かれている。

聡明そうな眼差しが加わると、先ほどまでの子供っぽい印象は薄れて、確かに思春期の少女らしい華やいだ魅力が匂い立つてくるようだった。

スレンダーだと思つていたのでその肢体も、近くで見ると肩や首筋には柔らかそうな丸みが多ならかなカーブを描いていて、しっかりと女性としての美しさを備えつつあることを示している。

聡真は、ちょっと息苦しくなるくらい緊張が高まってくるのを感じた。

「はじめまして。清淵学園中等部3年、鵜之瀬綾と申します。よろしくお願ひいたします、

先生」

人見知りと言われた割には、思ったよりも明るくはきはきとした声で少女は自分の名を名乗った。

「倉石聡真です。こちらこそよろしく、綾さん」

まっすぐに見つめてくる無垢な瞳がまぶしくて、わけもなく目を逸らしてしまいそうになるのをかろうじて堪えながら聡真も挨拶を返した。一応、年上の「先生」らしい余裕をもった笑みを浮かべていたつもりだったが、不自然でなかったかどうかは自分では分からない。

互いの自己紹介が終わった後で、聡真は先ほど気になったことを尋ねてみた。

「……あの、差し支えなければ教えてください。確か清淵でしたら、大学まで一貫制で進めたと記憶しておりますが」

聡真の通う啓英とは違う意味で有名な、誰でも知っている有名なお嬢様女子校だ。彼が言ったように幼稚園から大学まで教育課程の全てをまかなえるようになっており、清淵の肩書きはそのまま箱入りお嬢様の証明書ということになっている。よほどの素行不良でもあれば進学できないこともあるが、目の前の少女がそんな不良娘とは思えなかった。

「ほう。そういうことを率直に聞いてくれるというのはありがたいな」

あるいは不快にさせるかと迷った質問を、しかし功一は鷹揚に笑って受け止めた。

「あの学校は、確かにお嬢様を育てるための教育にはいいところなんだが、その分どうしても学業に関しては今一つ熱意に欠けているように感じられてね。今は女性も知性を磨かなければ世の中の流れに取り残されてしまう、そんな時代だ。それでこれと話し合つて、今度の進学を機に少しレベルの高い学校に挑戦してみようかということになったんだ。ご理解いただけただけかな」

「はい。……ご立派なお考えだと思います」

父親の隣で慎ましく座つた少女の顔をちらりと盗み見ると、彼女はふつくらとした唇をきゅつとつむつて真面目に二人の話に聞き入っていた。

学業に関してはそれなりの自負がある聡真は、同世代の人間ならいくらか言葉を交わせば相手のおおよその成績のレベルを推し量れる自信があつたが、先ほどその眼差しに無垢な愛らしさと同時に大人びた聡明さも感じた通り、少なくとも彼女は父親の言われるがままに進路を左右されるお人形さんというわけではなさそうだった。

「では、綾。先生をお部屋にご案内しなさい。しつかり教えていただくようにな」  
功一が言つて、綾が立ち上がる。

はにかみながら自分を先導してくれようとする細い後ろ姿に、聡真はこれがアルバイトであることも忘れてどきどきと胸を高鳴らせてしまつていた。

「……せい？ 先生、問題、終わりましたけど？」

柔らかく涼やかな声が耳をくすぐって、聡真ははっと我に返った。気がつくくと、時間はもうすぐ19分が経過しようとしているところだ。

綾は、もともと大きな瞳をさらに丸く見開いて、ぼんやりと突っ立ったままの家庭教師の顔を見上げていた。

（そうだ。あの時からもう、僕はこの娘に心を奪われてたんだな。でも……）

「先生、どうかさいますして？ ご気分が優れませんの？」

優しく気遣ってくれる可憐な容貌が、少年に愛しさとともに何とも言えない胸苦しさを感じさせる。

「すみません、ちよつとこの先の課題をどうしようか考えてたんですよ。……ほらね、僕の言った通り、時間内にできたでしょう？」

決して表に出せない本心を懸命に押し殺そうと努めながら、聡真は教え子に微笑みかけてノートを手にとった。

実際に彼女を教えるようになってすぐ、聡真は自分の直感が間違っていないことがわかったことを悟っていた。箱入りお嬢様は、その可憐でお淑やかな容姿の下に、なかなか侮れない知性を秘めていたのだ。

それだけならまだしも、自分の手でワンピースの裾をお腹の高さまで持ち上げさせられているので恥ずかしい部分を隠した小さな下着が丸見えになっている。さすがに平静ではいられないのか、彼女は顔を真っ赤に染めて固く目を閉じたまま男の行動を待っていた。

聡真はそんな彼女をじらすようにわざとゆっくり動きながら、少女の開かれた股間に顔を寄せるようにしゃがみこんだ。指先につまんだ、小さく音を立てるピンク色のローターを、まずは腿の内側の肌にそつと触れさせてみる。

びくんっ！ としなやかな身体がまるで電流を流されたように弾んだが、それでも声が上がらないのは、これまで続けられてきた勉強という名の調教プレイの成果だ。最初に聡真が綾の胸に触れてからわずか半月ほどで、二人の淫らな行為はこんな道具を使うところまでエスカレートしていた。

敏感な肌に文字を書きつけるように大人のおもちやを動かし続けると、綾はショーツの上のぞく白く引き締まったお腹を波打たせて懸命に悶えそうになる身体を抑えた。

「どうです、綾さん。何を書いているか、分かりますか？」

聡真はそんなお嬢様の初々しい反応を楽しみながら、手の中のローターで処女の内股を弄り続けている。

文字を書きつけるように——ではなく、彼はまさしくその手にした小さな器具で、彼女

の肌に英単語を書き記していたのだ。それが、今日の「勉強」だった。

「あつ……ふぁ……。んんっ、んふうっ……」

しかし、綾は自分の肌になぞられる文字どころか、聡真のその声すら聞こえているか怪しい様子で細い身体を快樂に震わせながら細く可愛らしい喘ぎ声を漏らし続けている。

ヴヴヴンッ！

ちよつと強めに薄い肌にプラスチックの玉を押しつけると、しつとりと汗ばんだ肌から少女の体臭がふわりと立ち上ってくるのを感じる。しかし今日は、もうすっかり覚えてしまったその香りの中に、いつもとはちよつと違う酸味を含んだ匂いが混じっているようだった。理由はすぐに分かった。

(……綾、感じて、濡れて……その匂い……！)

ローターを動かしながらも、聡真の視線は少女の清楚な下着にずっと釘付けにされていたのだが、その中央にいつの間にかじわりと小さな染みが広がっていたのだ。

それを見た瞬間、彼はもうどうにも我慢ができなくなった。ローターを床に投げ出すと、両手で脚を閉じ、細い腰からショーツを引き下げようとする。さすがに綾が目を見開いて声を上げようとしたが、

「最後の仕上げだから……そのままじつとしてて！」

先生のうわずった声に、何も言い返せず黙ってしまう。

そのまま膝先まで下着を下ろされて、聡真の目の前に少女の秘所がむき出しにされた。ぷっくりと盛り上がった肉唇はぴったり閉じ合わさっていて、そこを覆う茂みも薄く細く、まだうぶ毛とほとんど区別がつかないくらいだ。

しかし今、そのささやかな恥毛は割れ目から吐き出された粘液でぺたりと肌に張りついている。遮るものがなくなると、少女が快楽を感じてはしたなく溢れさせてしまった蜜の、ちよつと甘酸っぱいような匂いはさらに強くあたりに広がった。

（綾の……愛液）

聡真はそのまま、椅子ごと細い腰を抱え込むようにして閉じ合わされた股間に顔を埋めると、舌先を伸ばしてその部分をざらつと舐め上げる。

「あんっ！ せんせ、そんなとこ……なめたら……」

「いつも通り、きちんと覚えるためですよ」

二人の秘密の「授業」は、少年が少女の身体をしばらく弄んだ後に敏感な部分を刺激して強く感じさせ、終わるのがお決まりの手順だった。普段は胸や首筋などだったが、今日、とうとう少年は一線を越えて直接彼女の秘所をじかに目の当たりにしてしまったのだ。

平静な時にはこのままエスカレートしていいのだからかと心配することもあるのだが、いざ綾と二人きりになって彼女がそのか細くも魅惑的な肢体を委ねてくると、そんな理性はあっさりと吹っ飛んでしまう。



今も聡真は流れのままに、初めて見る少女の未成熟な性器の割れ目を舌でほじりながらその蜜を味わう動きを止められなくなっていた。

「あつ……せんせえ……そこ……そこお……」

純真そんな見た目によらず、綾の放つ雌の芳香は強く、蜜の味わいも濃厚だった。夢中で秘唇を広げて中の襞をなぞっていると、少女は自分から腰を押しつけるようにはしたなにおねだりを始める。一番恥ずかしい部分への刺激は、彼女にとってもそれまでとは違う大きな快楽を感じさせているようだった。

（確か……クリトリスって、この辺にあるって……）

これまで、雑誌やネットで覚えても使う機会のなかったセックスに関する知識だが、綾の身体を自分の手で好きなようにできるようになってからは聡真は欲望のままにいろいろと試してみるようになっていた。未知の部分を開いた興奮に息を荒らげながら、少年の舌は割れ目の上端あたりを集中してくりくりとつつき回す。

「あつ？ な、なに？ やあつ、そんな……っ！」

それまで慎ましやかにこぼれていた綾の喘ぎ声に戸惑いと隠しきれない艶が混じる。

その声を聞きながら、柔らかい襞の中にほちりと小さく尖った肉芽を探り当てると、聡真は思い切ってちゅうつと強めに吸い上げてみた。

「ひゃあうんっ！ ふあああ、ああああうんっ！！」

ぴちゃっ！ と割れ目の奥から新たな媚液を湧き出させて、綾の華奢な肢体がびくんびくんと震える。これまで、軽く達したように見えたことはあったが、男の目から見ても分かるほどはつきり絶頂したのは今日が初めてだった。

「かわいいよ、綾……。君は覚えが良いから、僕も覚えがいがあるんだ」  
ぐったりと背もたれに寄りかかる少女を見下ろして、少年は優しく囁きかけた。

「あの、先生。それは……」

二人の「授業」で、いろいろといやらしい刺激にも慣らされてしまった綾だったが、その日家庭教師が鞆の中から取り出したものを見るとさすがに戸惑いと怯えが入り混じった声を上げた。少年が手にしているのは、細くなめされた黒い麻の縄の束だったのだ。

「この先もどんどん覚えることは増えていきますから、気持ちよくなる方法もいろいろと試してみないといけませんからね。……それに、綾さんだって最近は生半可な刺激ではいけなくなっているんでしょ？ 実際に触れている僕には分かりますよ」

「……………」

聡真が縄を弄びながらあけすけに言うのと、少女は恥ずかしげに頬を染めてうつむいてしまふ。調教が始まって一ヶ月あまり、身体の方はどんどん馴染んで女の官能を覚え込んでいつているのに、心だけはこうやって初心な箱入り娘のままなのが彼にはたまらなく愛し

く、エロチックに感じられるのだった。

「そ、それは……。先生がいつも、綾をいっぱい触ったり、舐めたりするから……」

「おや、先生に口答えですか？ いけませんね。今日の授業は、おしおきも兼ねなくてはいけないみたいだ。さあ、さっそく始めますよ。服を脱いでください。パンティだけ残して、後は全部ね」

「……は、はい……」

口と態度ではためらっているように見えるが、少女のぱつちりとした瞳はすでに艶っぽく潤み、目元も紅を刷いたように赤く染まってきた。その身体はじゅうぶん快楽に溺れる準備を整えていることを知って、聡真は内心でほくそ笑んだ。

「せ、先生。脱ぎました……」

やがて綾はショーツだけをまとった、すらりとした裸身を家庭教師の前にさらけ出した。ほの白く輝くような肌とリボンを結った黒髪の編み込みはまだ成長途中の娘に相応しい取り合わせだったが、その髪がかかっている胸は服を脱ぐと意外と豊かで、彼女がもう女として男の欲望をそそるだけの身体の持ち主であることを示している。

さすがに自分から全てをさらけ出すのは抵抗があるのか、少女は胸を手で覆ってもじもじと身をよじっていた。

「隠してたら、ちゃんと気持ちよくなる場所が分からないでしょう。ほら、手をどけて」

「……………」

少年に強要されて、彼女はおずおずと恥ずかしい部分から掌を外す。

ぷっくりと尖り、桃色に色づいた乳首をあらわにしながら、お嬢様は顔を背けて懸命に羞恥に耐えようとしていた。

「さて、じゃあ、そのまま動かないでいてくださいよ」

聡真はその全身を値踏みするように見回しながら、細い身体に縄を打ち始めた。

緊縛プレイなどというのはもちろん生まれ初めてだが、ネットで調べれば縛り方なども覚えられる。やり方をいくつかプリントして持参していたが、最初から過激なものはずがに控えておくつもりだった。それに、肌に残ったりして、家の人間に露見する危険が生じるのもまずい。

後ろ手に回した手首は縄を緩めに巻きつけたが、それでも拘束された少女の不安げに見える眼差しが少年の隠された嗜虐心をゾクゾクと煽り立ててくれる。張りのあるおっぱいの上下を腕ごと縛ると、隙間から絞り出るようにこぼれた二つのふくらみのそのあまりの淫らさに、ペニスが今にも破裂してしまいそうにドクドクと脈打った。

「ん、うくうつ……。き、今日の先生、こわいです……」

上半身を緊縛された半裸の少女は、むっちり張りのある太腿をすり合わせながら落ちて着かない様子で聡真の顔を見上げている。

「……ふう、はあつ……。さつき言ったでしよう？　これはおしおきだって……」

しばらくその様子を楽しんで後、少年は再び欲望のままに動き出した。

（綾、まだ終わらないよ。も、もうちよつと……試させてもらおうから！）

本当は今日は上体だけで終わらせるつもりだったのだが、お嬢様の白い肌に絡まる黒い縄は想像以上にいやらしく、聡真の欲情を燃え上がらせていた。胸だけでなく、もつと敏感な場所まで固い縄が食い込んだら、上流階級の箱入り娘はどんな声で鳴いてくれるのだろう——そう考えると、手が自然に新しい縄の束を鞆から掴み出す。

まだ戒めが解かれないうところか、この上さらに縛られるらしいと知った綾は、ぶるぶる小さく震えながら何か言いたそうに少年の顔を見た。しかし聡真は、おしおきへの不安と期待なのだろうと都合よく解釈して何も聞かずに手を動かし続ける。

胸と同じように細い腰をぐるりと巻き、そのまま一筋の縄を前から両脚の間に通すと、その先どう縛られるか悟ったのだろう、綾はびくつと身体を震わせて後ろの聡真を振り向いた。

「いやらしい綾さんの身体には、このくらいの刺激は必要なんですよ」

その怯えた顔に優しくに囁き返して、聡真は握った縄をきゅつと引き上げる。

黒く細い筋がショーツ越しに小さなお尻の谷間に食い込んで——そして前では、もつと敏感な割れ目をえぐつたはずだった。

「ひあああつ、むぐふうつ！」

我慢しきれずに少女の喉からかん高い喘ぎ声が溢れて、聡真は慌ててその口を掌で覆う。華奢な脚ががくがくと震え、立っていられなくなつて床に両膝をついてしまった。

「あ……、やあつ！　せ、せんせいっ！　見ちゃいやあつ……！」

「え……？　あつ」

ちよろろ……と彼女の白い内股を液体が伝い落ちる。一瞬絶頂の潮吹きかと思つたが、量が多いのとむわつと立ち込める独特の臭気ですぐに違つたと分かつた。布越しとはいえ、敏感な粘膜への強い刺激に少女はお漏らしをしてしまったのだ。

「うつく、ぐすつ……。先生、見ないでえ……。綾のおしっこ、止まらないのお……」  
ショーツと股縄をじつとりと濡らして、お嬢様の排泄は続く。

（なるほど、ね。そういうことか……。そんなに怖がらなくても、言えばトイレくらい、行かせてあげたのに。ちよつと、おしおきが過ぎたかな？　でも……）

羞恥とある種の解放感に白い背中を震わせ続ける綾の後ろ姿を満足げに見守りながら、聡真はこの部屋の後始末のための口実と、それからこの粗相を理由に彼女にどんなおしおきを命じてやろうかと、そんなことを考えて始めているのだつた。

（先生、優しくしてください……）

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**